

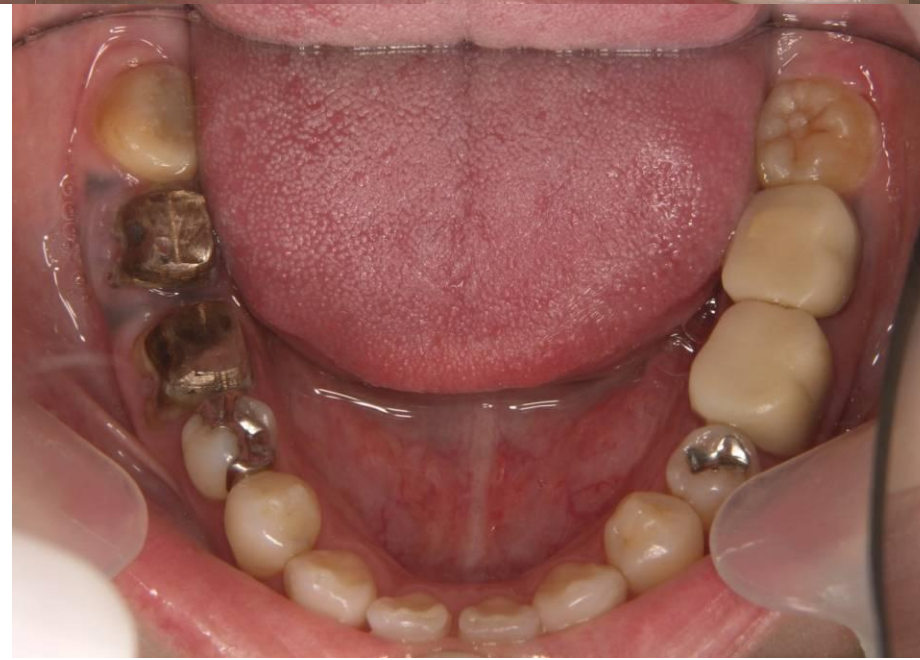
歯周形成外科により口腔内環境の改善を行い、 補綴治療を行った一症例

医療法人社団ティースプランニング
真鍋 直

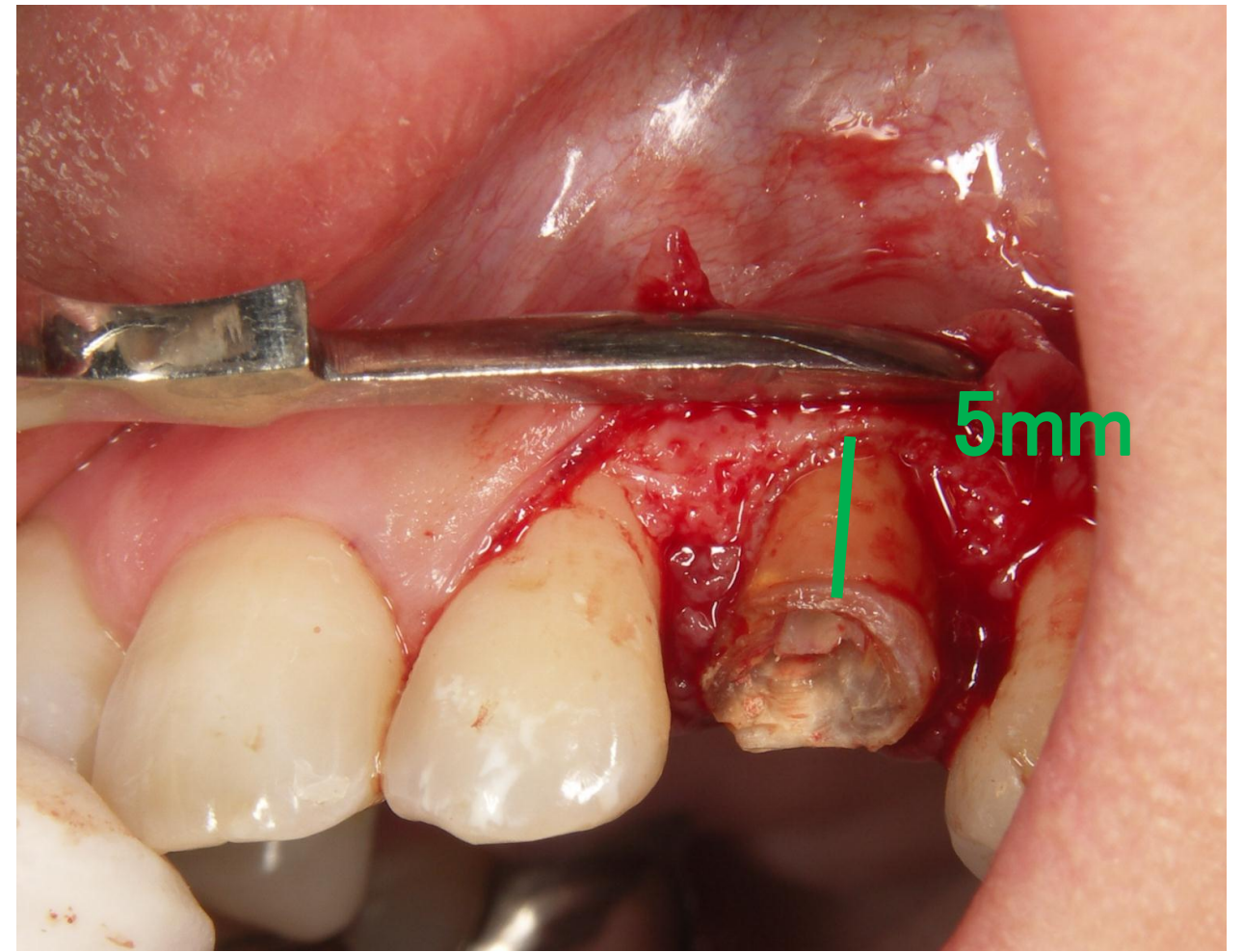
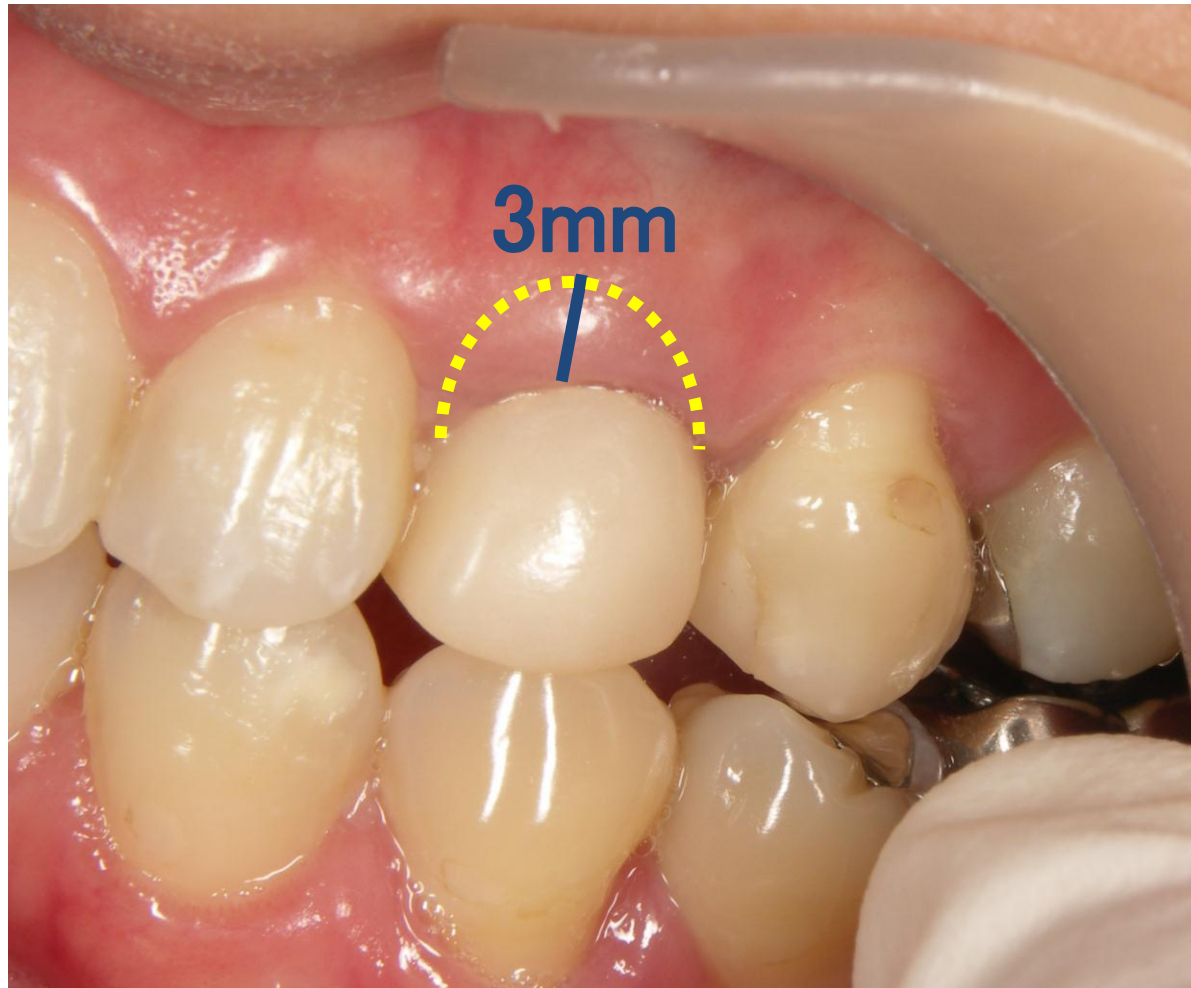
はじめに

- 臨床において、補綴治療を行う際、歯周組織は切っても切れない関係にある。
- 特に審美領域においては、スキヤロップの形態、歯間乳頭の形態等も考慮しなければ良好な結果は得られない。
- 本症例は、左上犬歯のスキヤロップ形態改善を目的とし、歯冠長延長術後、補綴治療を行った一症例である。

初診時



歯周形成外科 左上犬歯



唇側歯肉は理想的なスキヤロップ形態を想定し、最根尖側部をCEJから**3mm**に設定しスキヤロップ形態に切開を行った。
さらに、生物学的幅径を考慮し、骨整形を最根尖側部を**CEJから5mm**の位置に設定し切開線と同じようにスキヤロップ状に行った。

縫合後



術後10日 抜糸, TEK調整



4-0 ブレードシルクにて縫合
垂直マットレスによるholding suture
単純縫合によるclosing suture

術後28日



術後40日
ファイバーコア築造



術後120日



術後150日 最終補綴
ハイブリッド前装冠



初診時と最終補綴の比較



左上犬歯はスキャロップが揃い、審美的な形態を得ることができた。

まとめ

- 歯冠長延長術を行うことで、スキヤロップの形態を修正し、補綴治療を行ったことによって、患者様の満足を与えることができた。さらに審美的な要求の改善の他に、両隣在歯との歯肉のラインをそろえたことによってプラークコントロールの改善も行うことができた。
- また歯冠長延長術は支台高径の確保できない場合の補綴前処置にも有効である。ただし、角化歯肉を切除する術式であるため角化歯肉の高さ、大臼歯部では根分岐部の露出、有髄歯では歯髓症状が出てしまう可能性もあるので、術前の診査・診断が重要となる。
- 本症例から学んだ今後の改善点としては、歯間乳頭の可及的保存、切開線的位置や歯肉弁の剥離、縫合のクオリティーの向上をより確実にすることである。